志賀町

徳田宮前遺跡

2015

石川県教育委員会
（公財）石川県埋蔵文化財センター

徳田宮前遺跡

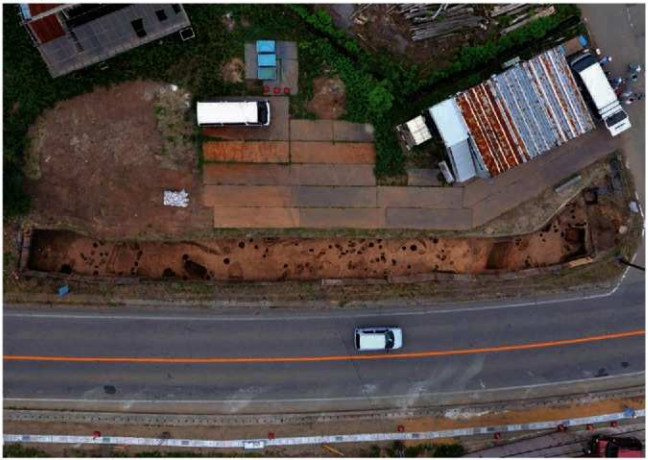
とくだ　みやのまえ

2015

石川県教育委員会
（公財）石川県埋蔵文化財センター

徳田宮前遺跡と徳田古墳群（西から）

矢田集落方面を望む（南東から）



A 区空中写真

B 区空中写真

例　　言

1　本書は徳田宮前遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は石川県羽咋郡志賀町矢田地内である。

3　調査原因は地方道改築事業主要地方道田鶴浜堀松線であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成 25（2013）年度から、平成 26（20014）年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。

5　調査に係る費用は石川県土木部道路建設課が負担した。

6　現地調査は平成 25 年度に実施した。期間・面積・担当は下記のとおりである。

期　　間　平成 25 年 4 月 23 日～同年 5 月 31 日

面　　積　380㎡

担　　当　調査部県関係調査グループ

立原秀明（専門員）、木原伊織（嘱託調査員）

7　出土品整理は、平成 26 年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。

8　報告書の作成は平成 26 年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。執筆は、澤辺利明（調査部県関係調査グループ主幹）、立原（調査部県関係調査グループ主幹）が行った。分担は下記のとおりである。編集は立原が行った。刊行は平成 26 年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。

第 2 章、第 3 章第 4 節：澤辺

上記以外：立原

9　調査には下記の機関の協力を得た。

石川県土木部道路建設課、石川県中能登土木総合事務所 羽咋土木事務所

10　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

11　本書についての凡例は下記のとおりである。

（1）方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系（世界測地系）に準拠した。

（2）水平基準は海抜高であり、T．P．（東京湾平均海面標高）による。

（3）出土遺物番号は挿図、観察表、写真とで対応する。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の方法と成果 …… 6
　第１節　調査の方法 …… 6
　第２節　層　　序 …… 6
　第３節　遺　　構 …… 8
　第４節　遺　　物 …… 21
第４章　総　　括 …… 36
報告書抄録

挿図目次

第１図　調査区位置図（S＝1/1,000） …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 3
第３図　周辺の遺跡 …… 4
第４図　調査区土層断面図（S＝1/60） …… 6
第５図　調査区全体図（S=1/200、1/5,000） …… 7
第６図　遺構実測図1（SK・SB） …… 9
第７図　遺構実測図2（SK・SD・P） …… 11
第８図　遺構実測図3（SD） …… 12
第９図　遺構実測図4（ST・SK） …… 13
第10図　A区平面図№1（S=1/80） …… 14
第11図　A図平面図№2（S=1/80） …… 15
第12図　A区平面図№3（S=1/80） …… 16
第13図　B区平面図№1（S=1/80） …… 17
第14図　B区平面図№2（S=1/80） …… 18
第15図　B区平面図№3（S=1/80） …… 19
第16図　B区平面図№4（S=1/80） …… 20
第17図　出土遺物実測図1 …… 24
第18図　出土遺物実測図2 …… 25
第19図　出土遺物実測図3 …… 26
第20図　出土遺物実測図4 …… 27
第21図　出土遺物実測図5 …… 28
第22図　出土遺物実測図6 …… 29
第23図　出土遺物実測図7 …… 30
第24図　出土遺物実測図8 …… 31

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 5
第２表　出土遺物観察表1 …… 32
第３表　出土遺物観察表2 …… 33
第４表　出土遺物観察表3 …… 34
第５表　出土遺物観察表4 …… 35

図版目次

図版１　A区完掘状況・A区遺構1
図版２　A区遺構2
図版３　A区遺構3・B区完掘状況
図版４　B区遺構1
図版５　B区遺構2
図版６　B区遺構3
図版７　調査着手前状況・遺構検出作業ほか
図版８　出土遺物1
図版９　出土遺物2

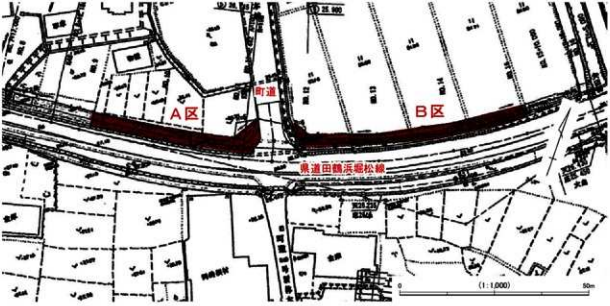
第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯（第１図）

本遺跡の発掘調査は、石川県土木部道路建設課（以下道路建設課）が所管する地方道改築事業主要地方道路田鶴浜堀松線に伴い、石川県教育委員会（以下県教委）及び公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）により実施されたものである。

田鶴浜堀松線の道路改築事業は、全体としては「のと里山海道」の徳田大津ＩＣと能登外浦の国道249号を連絡するいしかわ広域交流幹線軸整備事業の一部であり、道路交通環境の整備により広域的な地域の連携強化を図ることが目的とされている。

例年、石川県教育委員会文化財課（以下文化財課）では文化財保護の観点から、関係機関に次年度の事業内容について照会を行っており、平成23年度に道路建設課より田鶴浜堀松線の工事計画が提示された。平成24年１月に文化財課は事業予定地において分布調査が必要である旨を回答している。同年11月に工事を主管する石川県中能登土木総合事務所（以下中能登土木）より文化財課へ志賀町矢田から徳田地内にかけての分布調査依頼が提出され、同月に分布調査を実施したところ周知の埋蔵文化財包蔵地である徳田宮前遺跡を確認した。同年12月、文化財課は分布調査結果を回答した。協議・調整の結果、平成25年３月に中能登土木から県教委へ文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出され、埋蔵文化財が確認された380㎡について発掘調査を実施することが決定された。



第１図　調査区位置図（S=1/1,000）

第２節　調 査 の 経 過

平成25年４月、石川県と埋文センターで発掘調査の委託契約を締結した。埋文センターは文化財保護法第92条に基づく発掘届を県教委に提出した。18日に、中能登土木、文化財課、埋文センターによる発掘調査着手前の現地打ち合わせを行い、調査範囲、事務所・駐車場用地、現地作業での注意点などを確認した。この時には東側の調査地（Ｂ区）で道路沿いにあったコンクリート側溝が抜かれ

てしまっており、交通量が多く大型車両も頻繁に行き来する道路であることから壁面の崩落などが懸念された。23日から重機を使用して事務所・駐車場用地の造成を行い、30日・5月1日でA・B区の表土除去作業を実施した。また表土除去とあわせて道路側壁に合板をあてがって養生した。連休明けの7日から作業員による遺構検出を開始した。遺構は、弥生時代の土坑や溝などを検出した。13日に基準杭・グリッド杭の設置を委託実施した。遺構掘削と断面図等の記録作業を順調に進めていたが、20日にB区の中央付近と東端で道路側壁面の崩落がみられた。とり急ぎ復旧はしたものの、現状を長く維持することは困難なようにみられた。28日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。同日から30日まで強い雨が断続的に降ったため、またしても道路側壁面が崩落した。道路自体に影響がなかったことは幸いであった。29・30日に復旧と調査区の一部埋め戻しを行い、31日に中能登土木に現場を引き渡し、これを以って現地調査を完了した。

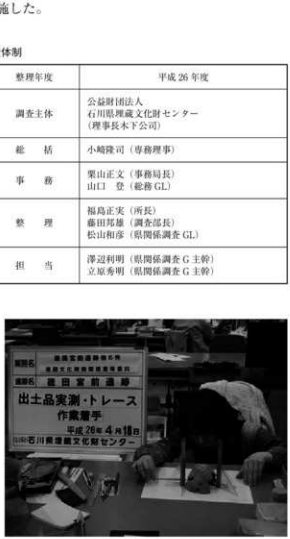
第3節　整理作業の経過

道路建設課から依頼を受けた県教委の委託事業として、平成26年度に出土品整理及び報告書の作成・刊行を実施した。出土品整理の内容は、記名・分類・接合、復元、実測・トレース。遺構実測図トレースなどである。なお、遺物の洗浄は平成25年度に実施した。

調査・整理体制

発掘調査年度	平成25年度	整理年度	平成26年度
調査主体	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター （理事長木下公司）	調査主体	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター （理事長木下公司）
総括	橋本定朗（専務理事）	総　括	小嶋隆司（専務理事）
事務	渠山正文（事務局長） 山口　登（総務GL）	事　務	渠山正文（事務局長） 山口　登（総務GL）
調査	福島正実（所長） 藤田邦雄（調査部長） 松山和彦（県関係調査GL）	整　理	福島正実（所長） 藤田邦雄（調査部長） 松山和彦（県関係調査GL）
担当	立原秀明（県関係調査G専門員） 木原伊織（県関係調査G嘱託調査員）	担　当	澤辺利明（県関係調査G主幹） 立原秀明（県関係調査G主幹）

空中写真測量風景



出土品整理作業風景

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地 理 的 環 境

徳田宮前遺跡は、石川県羽咋郡志賀町矢田地内に所在する。志賀町は日本海に突出した能登半島の中央部西側に位置しており、平成17年、北部の富来町と南部の志賀町が合併し誕生した。南北31km、東西12.7km、西は日本海に面し、北・東・南部は半島中央部にひろがる低丘陵に囲まれる。行政区画では、北は輪島市と穴水町、東は七尾市、南は羽咋市と中能登町に接する。

遺跡は現志賀町中央部東側、旧志賀町域では北東部を占める土田地区に所在する。土田地区は周囲を標高100ｍ前後の丘陵に囲まれた南北約1.5km、東西約3.5kmの土田盆地を中心とし、地区内の徳田、館開、火打谷、矢田、代田、印内、栗山、谷屋、仏木の各集落は丘陵や盆地周囲の谷平野裾、あるいは盆地内に舌状に張り出す台地周辺に営まれる。

第２図　遺跡位置図

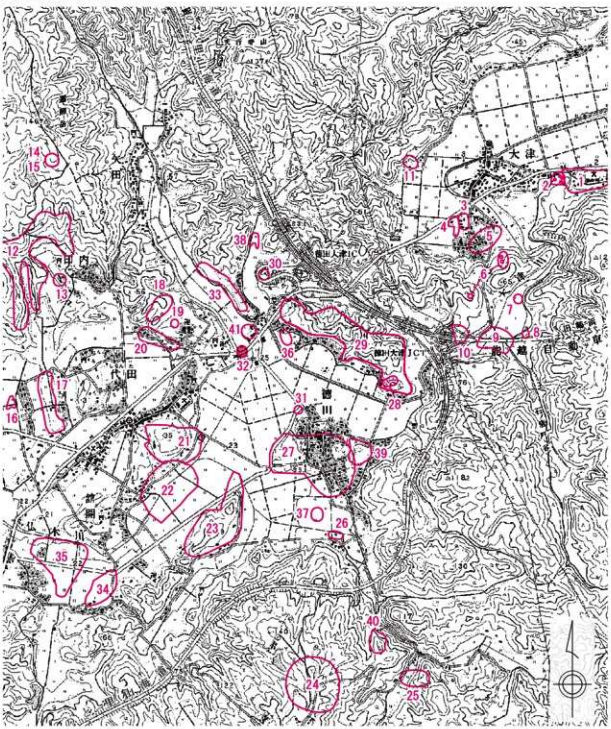
土田地区は能登半島が最も幅を狭める場所に位置し、東へは大津川あるいは大津峠を経由し、直線距離にして約３kmで能登半島内浦に面した七尾市大津に通じる。西へは盆地内を流れる仏木川を下り米町川経由で、あるいは標高約50ｍの火打谷山塊超えに、約８kmで半島西側の外浦に至ることのできる幹線道路上の要衝地であった。徳田宮前遺跡は、盆地北東部の丘陵裾の緩斜面から矢田川沿いの低地部にかけての、標高27 ～ 25ｍ地点に展開している。

第２節　歴 史 的 環 境

土田の地名は、古代において志賀町の中ほどに比定される越中国羽咋郡都知郷、平安時代末にここから分立された土田庄に由来し、徳田は中世、盆地内に置かれた得田保の遺称である。地区内には中世の在地領主得田氏の城跡（24）や館跡（27）、得田氏関連の館開城跡（23）が古くから知られ、「馬場跡」や「刑場跡」、「大館」などの伝承地も多く残る。

土田地区周辺では一帯のほ場整備にともない平成11 ～ 16年度にかけて発掘調査が実施され、現在水田となっている低地部において、河川の間に点々と集落が営まれた様相が明らかとなってきている。周辺の遺跡を概観すると、縄文時代では大津遺跡（５）では早期末、前期中葉～中期後半にかけての遺構が、大津くろだの森遺跡（９）では中期中葉の竪穴建物や後期中葉以降とされる環状木柱列、掘立柱建物が確認されている。土田地区内では代田営団Ａ・Ｂ遺跡（16・17）で中期～晩期の土坑や落とし穴が、館開城跡で落とし穴と石器が確認されている。そのほか徳田、仏木、館開、矢田、代田などで石器が、丘陵地の火打谷地区では中期中葉～後期中葉の縄文土器、石器が多数採集されており（芳岡1954）、盆地内外の丘陵部にはさらに縄文遺跡が存在するものとみられる。弥生時代では矢田遺跡（33）や館開館跡で後期の土器が出土し、得田氏館跡では後期～古墳時代中期の竪穴建物が確認されている。古墳時代では、館開城跡で溝から前・中期の土器が出土している。盆地北東部の丘陵上には

徳田古墳群（28～31）や代田古墳群（18）が築かれ、そのうち徳田１号墳（徳田燈明山古墳、28）は能登地域最大級の前方後円墳であることが知られる。盆地西部の丘陵上には印内ラントウ横穴群（12）、偏照ヶ嶽夫婦塚１・２号古墳（14･15）が築かれる。古代では館開テラアト遺跡（22）で遺物が、仏木新遺跡（21）、館開中開遺跡（34）、得田氏館跡で遺構・遺物が確認されている。中世では、先述の城跡、館跡のほか、館開野開遺跡（35）で区画溝や多数の掘立柱建物、竪穴建物や製鉄関連遺物が出土し、土田盆地の経済・手工業の拠点との見解が示されている。館開テラアト遺跡では井戸や掘立柱建物が確認されている。



※石川県遺跡・文化財情報システムを基に作成

第３図　周辺の遺跡

（県教委：石川県教育委員会、埋セ：石川県立理蔵文化財センター、埋保：社団法人石川県理蔵文化財保存協会、財埋：財団法人石川県理蔵文化財センター）

番号	遺跡名	県番号	所在地	現状	立地	種別	時代	出土品	備考
1	大津小学校遺跡	228000	七尾市大津町	その他（校地）	沖積平野	散布地	古墳、古代	須恵土器	敷地拡張の際出土。1995年度駐京は場整備事業で埋セ試掘調査
2	大津東古墳群	228100	七尾市大津町	山林	丘陵	古墳	古墳		円墳4基。横穴式石室有り
3	大津神社前遺跡	228200	七尾市大津町	水田、畑地	丘陵	散布地	その他（不詳）	土師器、須恵器	
4	大津神社境内遺跡	228300	七尾市大津町	その他（社地）	丘陵	散布地	弥生、古墳	小型台付甕式石棺、磨製石、土師器、須恵器	青銅利器模作遺物の出土地として性格の究明がまたれる。1995年度駐京は場整備事業で埋セ試掘調査
5	大津遺跡	228400	七尾市大津町	宅地、畑地、その他（社地）	丘陵	散布地	縄文、弥生、古墳、古代、中世	縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器、陶質土器、土師質土器	1991年度埋セ発掘調査
6	大津古墳群	228500	七尾市大津町	畑地	丘陵	古墳	古墳		円墳3基、横穴式石室
7	大津堂ヶ谷内遺跡	228600	七尾市大津町	山林、その他（林道）	丘陵	散布地	縄文	磨製石斧	1972年林道工事中に出土
8	大津東尻遺跡	228700	七尾市大津町	山林	丘陵	散布地	中世		1994年度埋セ発掘調査
9	大津くろだの森遺跡	228800	七尾市大津町	水田、畑地	その他（平地）	散布地	縄文	石鏃	1994・95年度埋セ、96年度埋保、99年度田田鵜浜町発掘調査
10	大津ロクベエ遺跡	228900	七尾市大津町	山林	丘陵	散布地	近世		1992・93年度埋セ発掘調査
11	大津B遺跡	232500	七尾市大津町	水田	丘陵［縄状］	集落	その他（不詳）		1995年度駐京は場整備事業で埋セ試掘調査
12	印内ラントウ横穴群	1528300	志賀町印内	山林	丘陵［頂部］	横穴墓	古墳		1974年度町・その他（県郷土資料館）発掘調査、13基確認、1号横穴に線刻文あり、町指定
13	土田印内遺跡	1528400	志賀町印内	宅地	台地［扇状］	散布地	その他（不詳）	小形石斧	
14	福照ヶ嶽天満塚1号墳	1528501	志賀町印内	山林	丘陵	古墳	古墳		1954年度その他発掘調査、円墳（径12.2m）、横穴式石室（無袖形、長5.3m、奥壁幅0.9m、高1.2m）
15	福照ヶ嶽天満塚2号墳	1528502	志賀町印内	山林	丘陵	古墳	古墳		1954年度その他発掘調査、円墳（径12m）、横穴式石室（無袖形、長5.8m、奥壁幅0.82m、高0.82m）
16	代田宮田A遺跡	1528600	志賀町代田	水田	扇状地	散布地	縄文、弥生、古墳、古代	縄文土器、石器、土師器、須恵器	1979・80年度町発掘調査
17	代田宮田B遺跡	1528700	志賀町代田	水田	台地	集落	縄文、弥生、古墳、古代	縄文土器、石器	1979・80年度町発掘調査
18	代田古墳群	1528800	志賀町代田	山林	台地	古墳	古墳		前方後方墳1基（全長20m）、円墳2基、方墳1基
19	代田八氏海地蔵墓	1528900	志賀町代田	山林	台地	その他の墓	中世		
20	代田遺跡	1529000	志賀町代田	宅地、水田	台地	集落	古代、近世、その他	須恵器、土師器、近世陶磁器	2004年度財埋発掘調査
21	仏木新林遺跡	1529100	志賀町仏木	水田、畑地	台地	散布地、集落	古代、中世	土師器、須恵器、珠洲焼	2003年度財埋発掘調査
22	館岡チラフ遺跡	1529200	志賀町館岡	水田、その他（河川）	扇状地	散布地、集落	弥生、縄文、古墳、中世	弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、青磁、漆器、木器、石斧	2002・03年度財埋発掘調査
23	館岡城跡	1529300	志賀町館岡	山林	丘陵	集落、城館	縄文、古墳、その他（不詳）	土師器、石器	2003年度財埋発掘調査
24	得田城跡	1529400	志賀町徳田	その他（雑木林）	丘陵	城館	その他（不詳）		
25	得田コイデ遺跡	1529500	志賀町徳田	道路	丘陵	散布地	縄文	土器、石鏃	
26	徳田湯ヶ谷内遺跡	1529600	志賀町徳田	水田	扇状地	散布地	縄文	磨製石斧	2002年度駐京は場整備事業で埋教委試掘調査
27	得田氏館跡	1529700	志賀町徳田	宅地	扇状地	集落、城館	弥生、古墳、古代	弥生土器、土師器、須恵器、石器	2003・04年度財埋発掘調査
28	徳田1号墳	1529801	志賀町徳田	山林	丘陵	古墳	古墳		前方後円墳（全長85.5m）、葺石、2段築成、町指定
29	徳田2～23号墳	1529802～23	志賀町徳田	山林	丘陵	古墳	古墳		円墳、方墳、前方後円墳
30	徳田24号墳	1529824	志賀町徳田	山林	丘陵	古墳	古墳		円墳（径30m、高5m）
31	徳田25号墳	1529825	志賀町徳田	山林	丘陵	古墳	古墳		円墳
32	**徳田宮前遺跡**	**1529900**	**志賀町矢田**	**水田**	**扇状地**	**集落**	**弥生、古墳、古代**		**2013年度財埋発掘調査**
33	矢田遺跡	1530000	志賀町徳田	水田、畑地	沖積平野	散布地	弥生	土器	
34	館岡中岡遺跡	1532900	志賀町館岡	水田	扇状地	散布地	その他（不詳）		1999年度駐京は場整備事業で県教委試掘調査、2001年度財埋発掘調査
35	館岡野岡遺跡	1534000	志賀町館岡	水田	扇状地、沖積平野	集落	中世	土師器、陶磁器、瓦質土器、漆器、木器、鉄製品、布帽、羽口、鞴型、鋳型	1999年度駐京は場整備事業で県教委試掘調査、2001年度財埋発掘調査
36	徳田B遺跡	1534100	志賀町徳田	水田	扇状地	集落	縄文、古代、中世		1999年度駐京は場整備事業で県教委試掘調査
37	徳田湯ヶ谷内B遺跡	1534200	志賀町徳田	水田	扇状地	集落	縄文、古代、中世		2002年度駐京は場整備事業で県教委試掘調査
38	徳田サンマザ遺跡	1534300	志賀町徳田	水田	扇状地	集落	古墳、中世		2005年度駐京は場整備事業で県教委試掘調査
39	石田館跡	1535600	志賀町徳田	畑地	丘陵	城館	中世		
40	青谷城跡	1535700	志賀町青谷	山林	丘陵	城館	中世		
41	矢田B遺跡	1536000	志賀町矢田	宅地、水田	沖積平野	散布地	古墳		

第1表　周辺の遺跡一覧

第３章　調査の方法と成果

第１節　調 査 の 方 法（第１・５図）

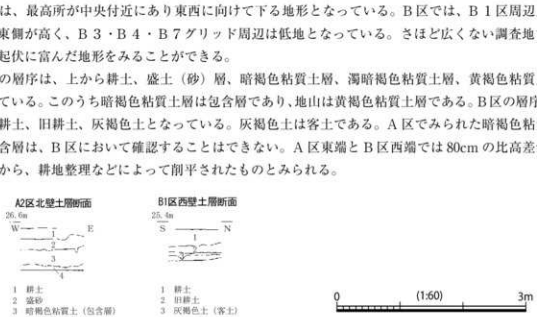
調査地は、県道から矢田集落に向かう町道を境に分かれ、これより西をＡ区、東をＢ区とした。Ａ区は東西方向の延長約 33 m、Ｂ区は同じく 60 m、南北方向の幅は共に３～５ｍほどで、これらは道路に沿って緩やかに湾曲している。どちらも幅が狭いため任意の杭を延長方向で見通せる位置に設け、区名と合わせて西からアラビア数字を付しグリッド杭名とし、その西側を範囲とする小区を設定した。なお、杭は基本的に東西方向 10 m間隔で計画したが、都合により打設位置を変更したため等間隔にはなっていない。出土遺物の取り上げは遺構を基本とし、そのほかは小区ごとに、Ｂ３・Ｂ４区の低地部に堆積した黒褐色系土からの出土遺物は鞍部として取り上げた。

表土除去作業は、バックホーを使用した。Ａ区の東から西に向けて進みＡ１区の北側に残土を集積した。Ａ５区の半分より東側は撹乱を受けていた。Ｂ区も西から東にむけて進み、残土は借地した隣接地の田面にブルーシートを敷きその上に置いた。表土除去後は、Ａ区、Ｂ区の順番で人力による遺構の検出・掘削を実施し、必要に応じて断面図作成や写真撮影を行った。遺構には、掘立柱建物（SB）、土坑（SK）、溝（SD）、落ち込み等（SX）、柱穴・小穴（P）などの略号を使用した。なお、Ｂ５区のST １は当初竪穴建物を想定し、後に自然地形と判断したものだが煩雑になるのでそのまま使用した。遺構掘削完了後は、ラジコンヘリによる空中写真測量を実施した。

第２節　層　　序（第４図）

標高は、Ａ区西端 25.3 m、Ａ１グリッド付近 25.8 m、Ａ２グリッド付近 25.9 m、Ａ３グリッド付近 25.8 m、Ａ４グリッド付近 25.5 m、Ｂ１グリッド付近 24.8 m、Ｂ２グリッド付近 24.6 m、Ｂ３グリッド付近 24.1 m、Ｂ４グリッド付近 24.3 m、Ｂ５グリッド付近 24.7 m、Ｂ６グリッド付近 24.6 mであり、Ａ区では、最高所が中央付近にあり東西に向けて下る地形となっている。Ｂ区では、Ｂ１区周辺及びＢ５区東側が高く、Ｂ３・Ｂ４・Ｂ７グリッド周辺は低地となっている。さほど広くない調査地ではあるが起伏に富んだ地形をみることができる。

Ａ区の層序は、上から耕土、盛土（砂）層、暗褐色粘質土層、濁暗褐色粘質土層、黄褐色粘質土層となっている。このうち暗褐色粘質土層は包含層であり、地山は黄褐色粘質土層である。Ｂ区の層序は、上から耕土、旧耕土、灰褐色土となっている。灰褐色土は客土である。Ａ区でみられた暗褐色粘質土層＝包含層は、Ｂ区において確認することはできない。Ａ区東端とＢ区西端では 80cm の比高差があることから、耕地整理などによって削平されたものとみられる。



第４図　調査区土層断面図（S=1/60）

第５図　調査区全体図（S=1/200、1/5,000）

第３節　遺　　構

１．土　　坑

SK1（第 12 図）　Ａ５区で検出した。全形の半分以上が調査区外にあるため詳細は不明であるが、平面に角が確認できたことから隅丸方形を呈するとみられる。壁は垂直気味に立ち上がり、深さは 0.64 mを測る。

SK2（第６図）　Ａ５区で検出した。東側は撹乱を受けているが、平面は長方形を呈し短辺 1.1 m、深さ 0.72 mを測る。掘り方は箱状になっており、底面にもしっかり角が確認できる。土坑の上～中位にかけて土器片が多く出土した。SK ４に切られている。

SK3（第６図）　Ａ２区で検出した。南側は調査区外にあるが、平面は楕円形を呈し短径 1.2 m、深さ 0.2 mを測る。

SK4（第６図）　Ａ５区で検出した。全形の半分以上が調査区外にあるため詳細は不明である。遺構検出時は西側の浅い落ち込みに続くものと思われたが、一段掘り下げると土坑平面を確認することができた。平面は、一部に角が確認できたことから方形または長方形を呈するとみられる。底面は傾斜しており、西側は深さ 0.2 m、東側 0.55 mを測る。

SK5（第６図）　Ａ２区で検出した。平面は隅丸方形を呈し長さ 1.8 m、幅 0.95 mを測る。断面は逆台形状で、底には小段がみられる。底面までの深さは、北西側 0.61 m、南東側 0.75 mを測る。層１～３まで土器小片が出土した。

SK6（第 10 図）　Ａ１・Ａ２区境で検出した。全形の半分以上が調査区外にあるため詳細は不明であるが、平面に角が確認できたことから方形または長方形を呈するとみられる。壁は垂直気味に立ち上がり、深さは 0.44 mを測る。

SK7（第６図）　Ｂ２区で検出した。南側が調査区外にあるが、平面は崩れた隅丸長方形を呈し長さ 2.5 m以上、幅 1.55 mを測る。壁は緩やかな立ち上がりで、底は小段がみられる。底面までの深さは、北側 0.3 m、南側 0.52 mを測る。

SK9（第６図）　Ｂ５区で検出した。平面は隅丸方形を呈し長さ 1.2 m、深さ 0.35 mを測る。覆土は単層で、地山の青灰色土ブロックがまばらに混入していた。

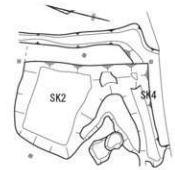
SK10（第７図）　Ｂ５区で検出した。SD ９と重複するが土層断面の観察から、それ以前の遺構と判断できる。平面は楕円形を呈し長さ 0.56 m、深さは SD ９の底面から 0.28 mを測る。

SK11（第６図）　Ｂ５区で検出した。長さ 0.4 mほどの不整形な土坑に 0.4 mほどの溝状部分が続いている。深さは 0.25 mを測る。

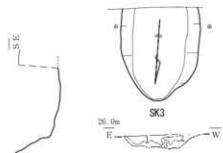
SK12（第９図）　Ｂ５区で検出した。ST １とした自然地形の落ち込み内にあり、平面は不整形で東西方向の長さ 0.68 m、深さ 0.25 mを測る。

SK13（第９図）　Ｂ５区で検出した。ST １とした自然地形の落ち込み内にあり、長さ 2.5 mあるが、主体的な部分では 2.1 m、幅 0.74 m、深さは南から 0.7 m、0.44 m、0.73 mと階段状に掘られている。深い部分の段差付近で第 18 図 21 の甕が逆さまの状態で出土している。

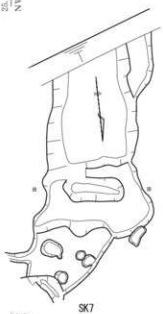
SK14（第７図）　Ｂ７区で検出した。北側が調査区外にあるが、平面は円形で長さ１m、深さ 0.26 mを測る。接する北壁の土層観察から SD ６以前の遺構と判断できる。弥生時代中期後葉の土器が出土している。第 18 図 28 の須恵器蓋は SK14 覆土と客土の境で出土したものである。



1　暗褐灰色土（炭粒含む）
2　暗褐灰色土（層1より暗い色調）
3　黒褐灰色土
4　濁暗褐灰色土（地山土混）
5　暗褐色土（炭粒含む）
6　褐色土（炭粒、焼土粒、土器片含む）
7　暗褐色土（炭粒含む、土器片多く含む）
8　暗褐色土（地山粒含む）
9　暗褐色土（炭粒、土器片含む）
10　暗褐色粘質土（地山土少し混）
11　暗褐色粘質土（地山土多く混）
12　暗褐色粘質土（層10・11より暗い色調）
13　濁暗褐色粘質土（地山土混）
14　濁暗褐色粘質土（地山土多く混）
※1～4はSK4覆土

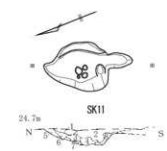


1　黒褐色粘質土（炭粒微量混）
2　黒褐色粘質土（層1よりやや明るい色調、黄色ブロック少量混）
3　黒褐色粘質土（地山土、黄色土ブロック、炭粒少量混）

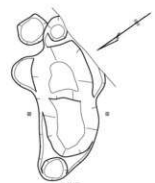


1　暗褐色土（地山粒混）
2　濁褐色土（地山ブロック多量混）
3　暗褐色土
4　暗褐色土（層1・3より暗い色調　土器片含む）
5　濁暗褐色土（羽粘質、地山土混）
6　濁暗褐色土（地山土混）

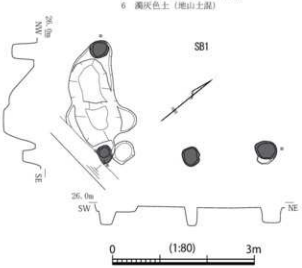
1　濁暗褐色土（青灰色土多く混）



1　暗褐色土
2　暗褐灰色土
3　濁黄褐色土（暗褐灰色土多く混）
4　濁黄褐色土（暗褐灰色土少し混）
5　暗褐灰色土（黄色土少し混）
6　濁灰色土（地山土混）



1　暗褐色土（粘土粒、炭粒、土器片微量含む）
2　暗褐色粘質土（炭粒、粘土粒微量混）
3　暗褐色土（層1より暗い色調、炭粒、土器片微量混）
4　暗褐色土（3～4cm大粘土粒少量混）
5　暗褐色砂質土（地山土微量混）
6　褐灰色砂質土



0　(1:60)　3m

0　(1:80)　3m

第６図　遺構実測図１（SK・SB）

２．溝

SD2（第７図）　Ａ４区で検出した。南北方向にのびており上幅 1.5 ～ 1.6 m、深さ 0.45 mを測る。断面は逆台形状を呈する。

SD3（第 10 図）　Ａ１区で検出した。南北方向にのびており上幅 0.4 ～ 0.58 m、深さ 0.1 mを測る。本遺構より西側は低くなる地形となっている。

SD5（第７図）　Ｂ２区で検出した。南北方向にのびており上幅 2.7 ～ 3.1 m、深さ 1.3 mを測る。砂質土を主体として埋まっており、１mほど掘り下げた時点で湧水がみられた。出土遺物が少なく第 18 図 29 の土器を図示しているが、覆土は弥生時代のものより新しい印象を受ける。

SD6（第７図）　Ｂ７区で検出した。北西－南東方向にのびている。上幅 1.7 m、深さ 1.3 m以上である。断面は逆台形を呈し、底付近の壁は垂直気味に立ち上がる。あらかじめサブトレンチにより深さを確認していたので、調査地外に接する三方は安全帯を設けたが、掘削中に道路側が崩落したため手実測による平面図作成後に埋め戻した。本遺構からは、第 19 ～ 22 図に図示した残りの良い土器がまとまって出土した。

西側のＢ６・Ｂ７区では、本遺構に沿って浅い落ち込みがともなう。これより東の矢田川に向けては低地になることが分布調査で確認されており、その落ち際にあたるものと考えられる。また、落ち込みラインに沿うように杭が打たれていたが、客土の暗灰色土層付近から打たれた様子なので新しいものであろう。

SD7（第８図）　Ｂ３区で検出した。北西－南東方向にのびる。Ｂ３・Ｂ４区の低地に堆積した黒褐色系土（第８図層 11）を基盤として構築されているが、同様の黒褐色系土を覆土とする本遺構の形状を把握することが困難であったため、地山の青灰色シルトまで掘り下げた際に遺構上部を削ってしまった。本来の規模は上幅 2.1 m、深さ 0.5 mを測る。SD ８を切っている。

SD8（第８図）　Ｂ３区で検出した。北東－南西方向にのびる。SD７と同様に遺構上部を削ってしまった。本来の規模は上幅３m、深さ１mを測る。本遺構からは、第 23 図に図示した残りの良い土器がまとまって出土した。

SD9（第７図）　Ｂ５区で検出した。南北方向にのびており上幅 1.15 m、深さ 0.24 mを測る。底面の南側では SK10 を検出した。

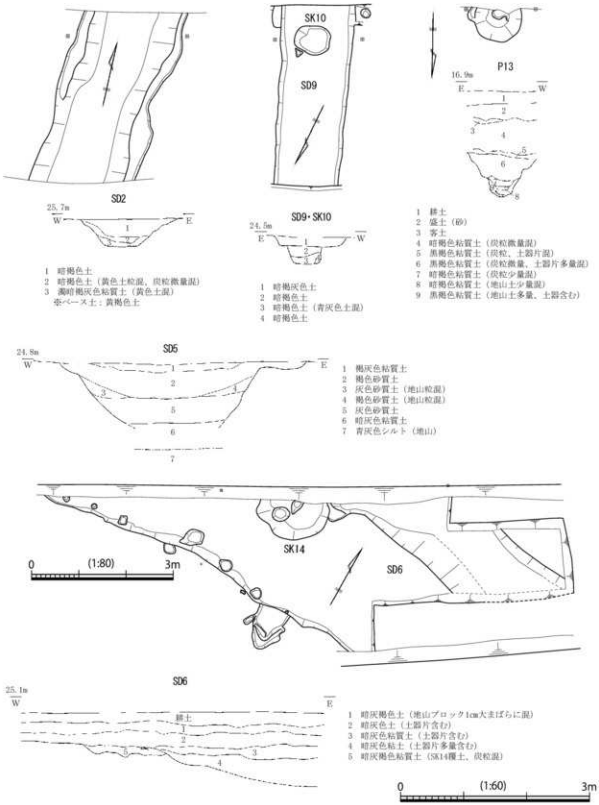
３．掘立柱建物

SB1（第６図）　Ａ２区で検出した。調査区内での最高所にあり、小穴の配置状況から掘立柱建物と推定した。北側が調査区外へのびるものの、二間四方以上の建物とみられ北東－南西方向 3.5 m、北西－南東方向 2.2 m、柱間 1.75 mを測る。柱穴は径 0.30 ～ 0.40m ほどの円形を呈し深さは 0.34 ～ 0.50m である。

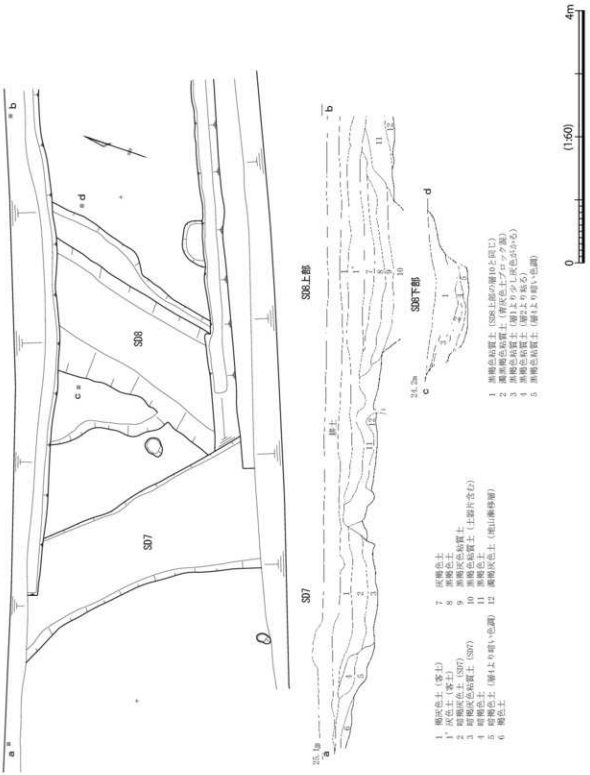
４．その他

P13（第７図）　Ａ１区で検出した。南側が調査区外にのびるものの平面は円形を呈するようにみられ、径 1.1 m、深さ 0.66 mを測る。底面付近で第 24 図 90 の土器が横倒しになった状態で出土している。穴の中位ほどから掘り方が一回り小さくなっており、覆土もそれを境に異なっている。

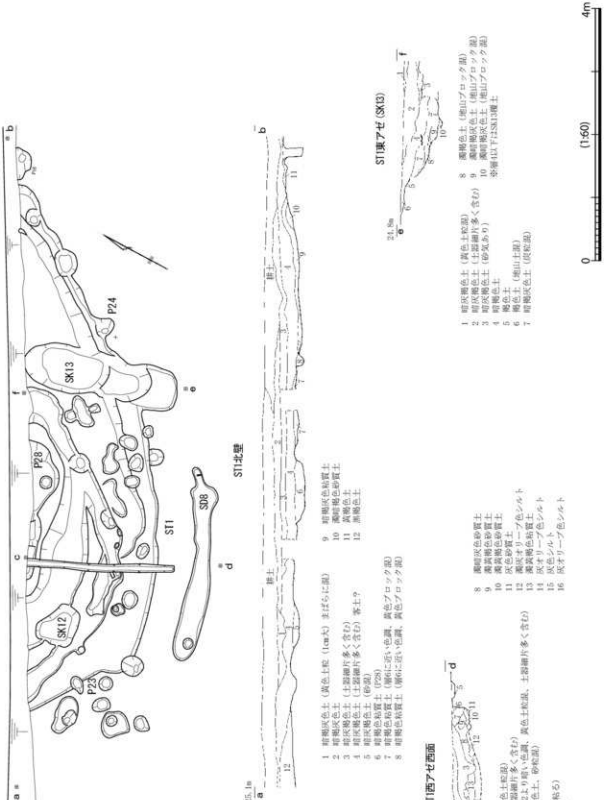
ST1（第９図）　Ｂ５・Ｂ６区で検出した。当初は竪穴建物を想定したが、建物としての構造をなしていないことから自然地形と判断した。落ち際で半円状に溝らしきものが巡り、その底には小石や砂が堆積していたことから、川の氾濫などによる浸食作用の痕跡と考えられる。弥生時代中期後葉の SK13 などを切っている。客土とみられる暗灰褐色土で埋まっているため、新しいものと考えられる。



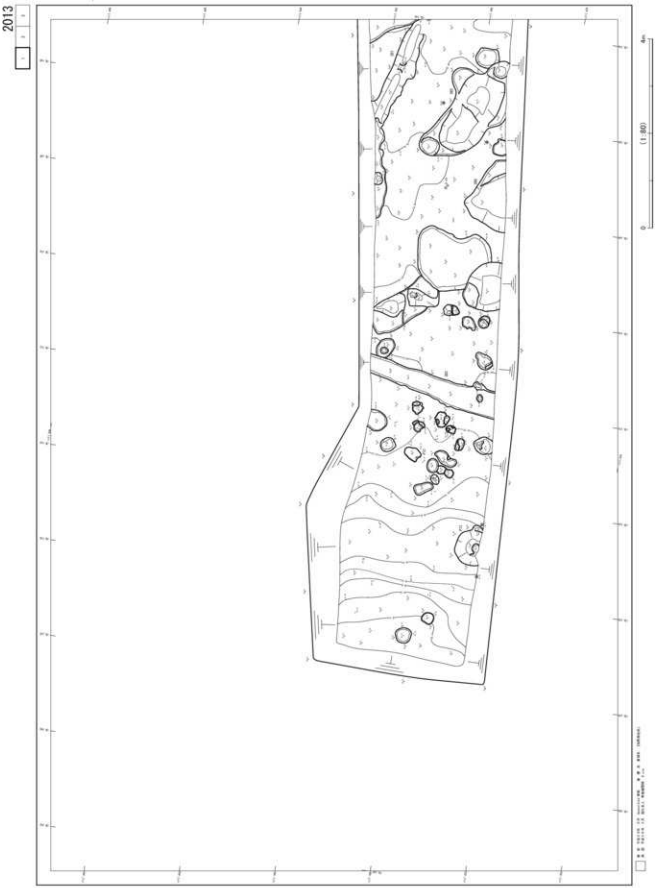
第７図　遺構実測図２（SK・SD・P）



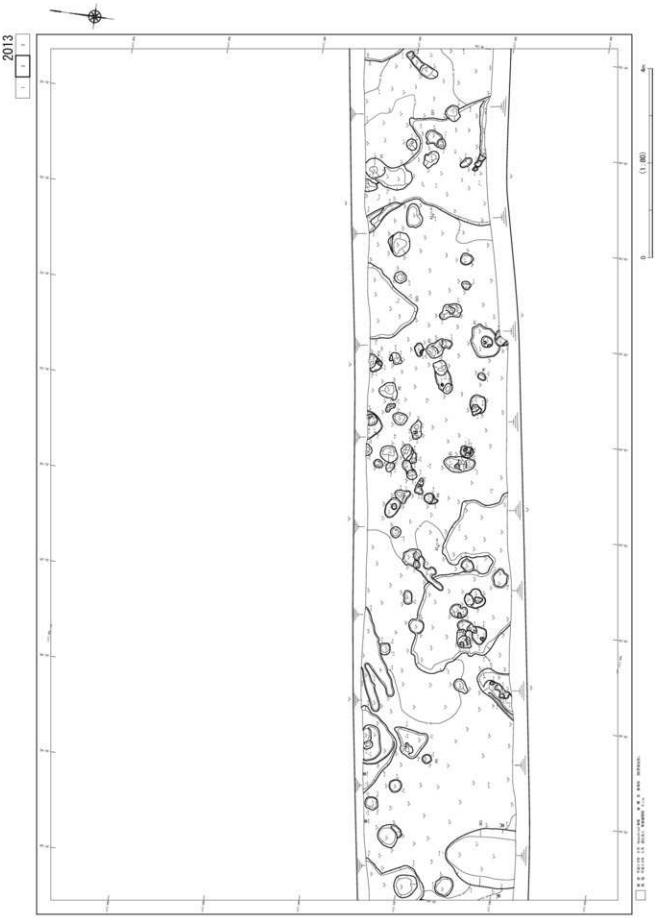
第８図　遺構実測図３（SD）



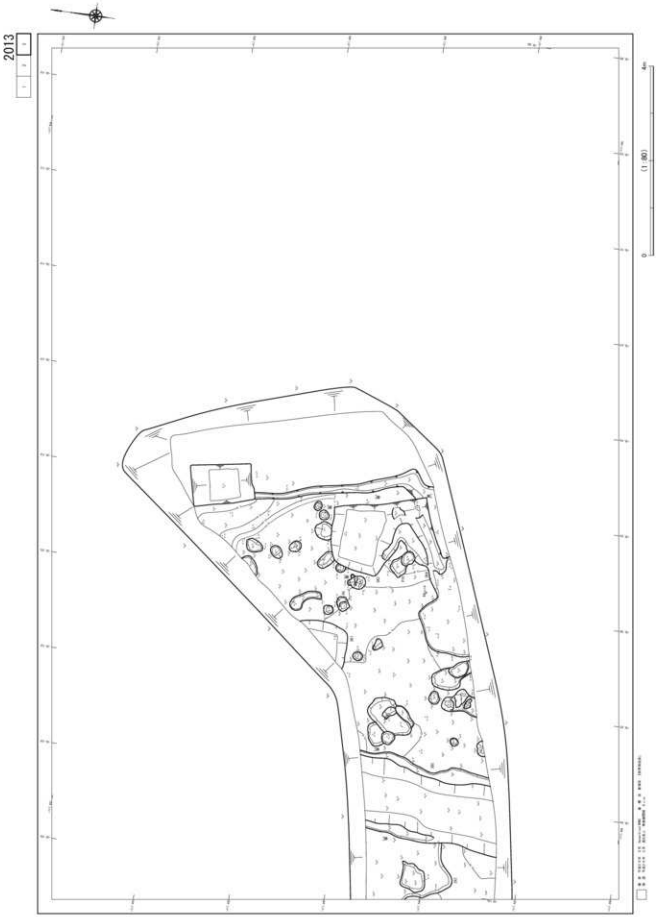
第９図　遺構実測図４（ST・SK）



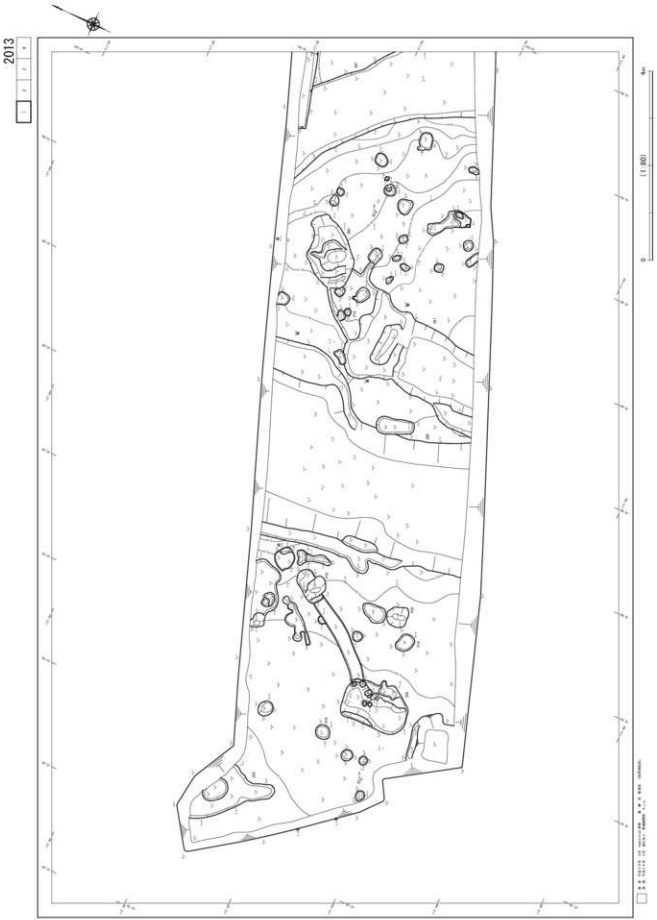
第10図　A区平面図No.1（S=1/80）



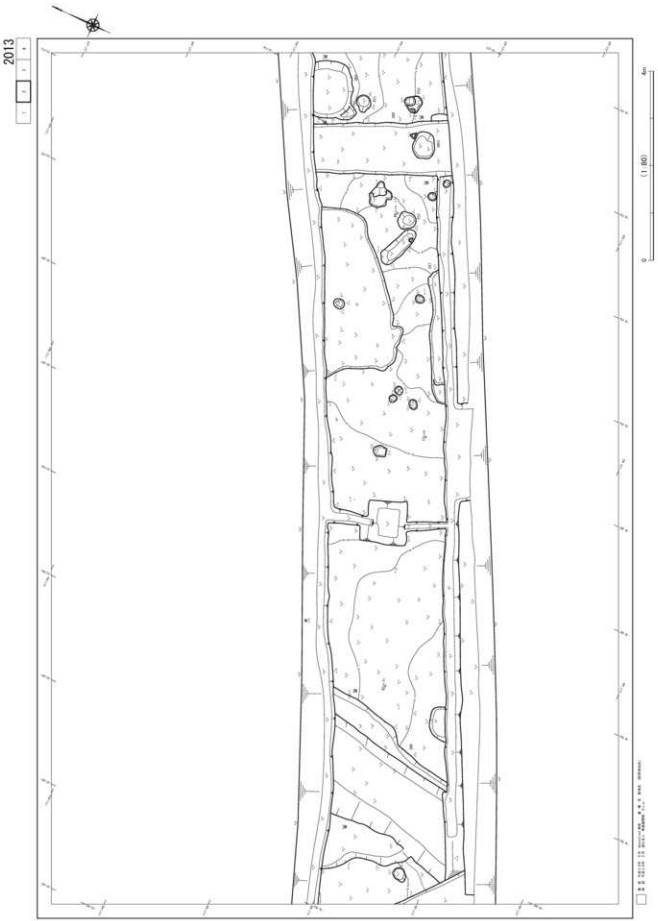
第 11 図　A 区平面図No. 2（S=1/80）



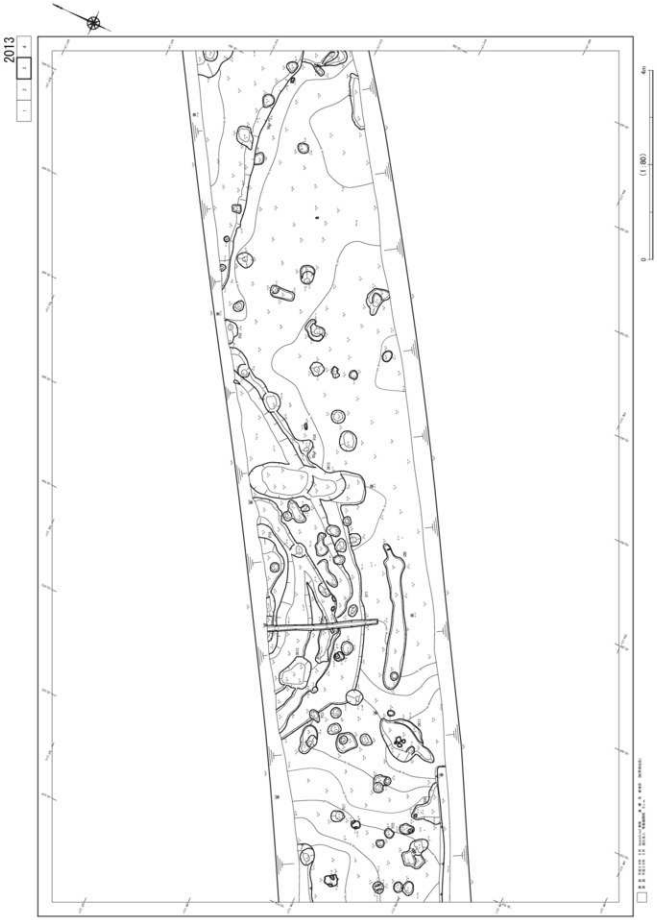
第12図　A区平面図No.3（S=1/80）



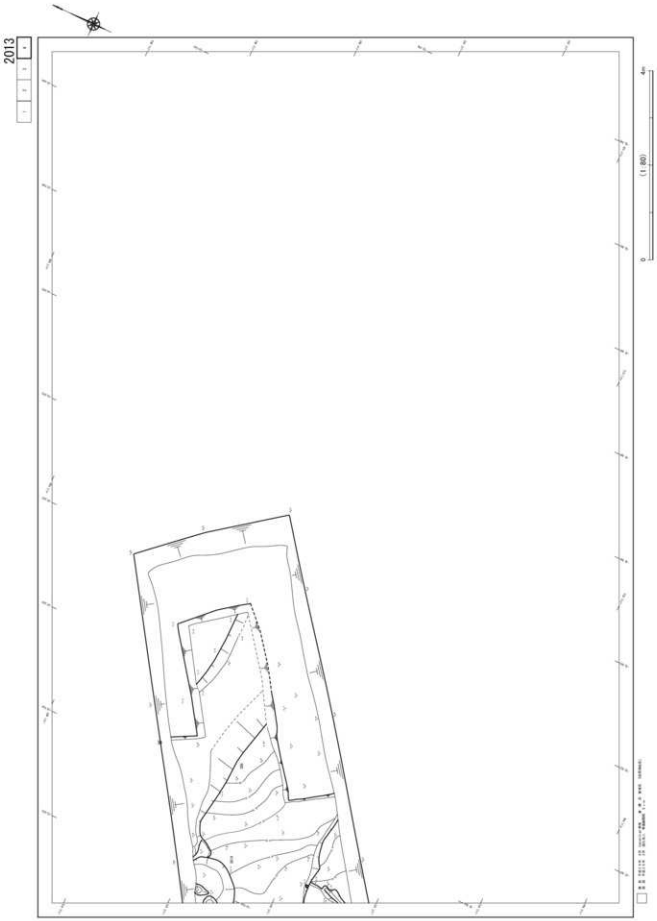
第 13 図　B 区平面図No. 1（S=1/80）



第 14 図　Ｂ区平面図No.２（S=1/80）



第 15 図　Ｂ区平面図No.３（S=1/80）



第 16 図　Ｂ区平面図No.４（S=1/80）

第４節　遺　　物

出土遺物はＬⅡ型パンケースにして11箱を数える。図化遺物は、２点の須恵器を除きすべて弥生時代、中でも中期後葉～後期後半に位置づけられるものである。

１～５はＢ区ST １出土である。２は須恵器甕。３は西アゼ端から出土した黒色頁岩製の有茎石鏃であり、基部をわずかに欠く。長さ2.5cm、最大幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量2.19ｇを測る。４はガラス質安山岩製の石匙であり、刃部幅7.5cm、高さ3.8cm、厚さ0.9cm、重量25.16ｇを測る。５は太型蛤歯石斧であり、基部を欠損する。側面の面取りは弱く敲打のみの仕上げである。表裏面は研磨するが、部分的に敲打成形のまま残す。刃部は使用により破損・摩滅する。安山岩製。残存長8.6cm、幅5.1cm、厚さ3.6cm、重量235.4ｇを測る。ST １からはほかに中期後葉～後期前葉の土器小片が出土している。

６～９はＡ区SK ２出土である。６は無形壷とみられ、直径４㎜の孔が２個穿たれる。７は小型の甕。８は外反する甕口縁部であり、角張らせた口縁部の上下を刻む。９の甕は磨耗が激しく調整は観察できない。いずれも中期後葉の所産である。

10はＡ区SK ４出土の広口壷である。口唇部を下に引き出す。ほかに中期後葉とみられる甕が出土しており、中期後葉の遺構とみられる。

11はＡ区SK ５出土の甕である。角張らせた口唇部外面に刻みをめぐらす。中期後葉のもの。

12～16はＢ区SK ７出土である。12の壺はゆるく外傾する口縁部を持ち、強いナデにより突出させた上に刻みをめぐらす。肩部にも刻みを加える。13の壺は肩部に扇形文を２段めぐらす。14の甕は、やや受口状の口縁部外面に刻みを加える。15の甕は、外傾する口縁部と、倒卵型の胴部を持ち口唇部上縁に刻みをめぐらす。16は壺体部とみられ、櫛描きにより直線・波状・コンパス文を描く。いずれも中期後葉の所産である。

17・18はＢ区SK10出土である。17の壺は口唇部を外側にわずかに肥厚する。18は内・外面を磨く受口状口縁の壺。SK10からはほかに後期前葉および後葉の高杯小片が出土しており、図化土器も当該期の所産とみられる。

19はＢ区ST １内SK12出土である。SK12からはほかに後期の甕、高杯小片が出土している。

20～23はＢ区SK13出土である。20は大型の壺。21の甕は外反する口縁部内面に綾杉状刺突を、口唇部下端に刻みをめぐらす。22の甕は外反する口縁部内面に斜向刻みをめぐらす。いずれも中期後葉に位置づけられる。

24～28はＢ区SK14からの出土である。24は中膨らみの胴部を持つ小型壷、体部内面上位にケズリを加える。25の甕は角張らせた口唇部上縁に刻みを加えるが全周するものではなく、４cm幅で施文し、無文部を6.5cm設けている。28は奈良時代の須恵器坏蓋。つまみ直径3.1cm。流れ込みとみられる。SK14出土の弥生土器はいずれも中期後葉に位置づけられる。

29はＢ区SD ５出土の甕であり、外反する口縁部に直径４㎜の円形スタンプ文が密に施される。

30～71はＢ区SD ６出土である。

30～38は壺である。30の壺は短く立ち上がらせた口縁部外面に凹線を３条加える。31～34の長頸壺は、口縁部の形状が若干異なるがいずれも鈍い橙色を呈し、器厚、精良な胎土、堅緻な焼成が似通っている。32は口縁部に１段の稜を持ち、外面にかすかに赤彩が残る。35は堅緻な焼成をなす。36は外傾する口縁部に２段強いナデを加え、口唇部はやや角ばった形状となる。37は内外面を赤彩する広口壺。内面をミガキ調整する。38も広口壺であり、肥厚した口唇部外面に２個一対の円形浮文を貼付

する。

39～52は甕である。39は大きく外傾する口縁部内面に綾杉状刺突を加える。40は弱く外傾する口縁部外面に刻みをめぐらす。41は短くくの字に折れた口縁部端を上下に引き出す。胴部内面にケズリを加え器肉は薄い。42は外面全体にススが付着する。43は外反するくの字口縁を持つ小型甕。口縁端部は丸くおさめる。胴部中位から口縁部にススが付着する。44は上げ底の底部を持つ小型甕。45は口縁部外面と肩部に刻みをめぐらす。46は短く折り上げた口縁部を持つ。47は胴上半部に刻みをめぐらす。48は外傾する口縁部端に面をとる。49は口縁部を外側に肥厚し、胴部中位から下と口縁部外面にはススが付着する。50は胴部内面にケズリを加え、特に薄い器肉をもつ。51は突出した底部をなす。

53～62は高杯であり、うち53・60～62は器台の可能性もある。53は器肉の薄い小型品であり、口唇部を短く摘み上げる。内・外面に赤彩を施す。54も小型品であり、口縁部外面を赤彩する。55は棒状脚部に有段の裾部をもつ。孔は6個とみられる。56は口縁部内外面を赤彩する。断片で不確かだが、口縁部下半に把手接着のための円孔1個が残る。57は内面の一部を赤彩する。58は短く外反させた口縁端に水平な面をとる。59は短く外反させた口縁部を持つ。口縁段部に2条の凹線をめぐらし、なだらかに広がる脚裾部に4孔を穿つ。60は脚裾部に4孔を穿つ。61は脚裾部に4孔を穿つ。62は棒状脚部から広がる裾部に6孔を穿つ。63・64は器台である。63は内外面を赤彩する。口縁部を短く折り上げ、大きく広がる脚裾部は有段をなし、6孔を穿つ。64は外傾する有段口縁部に擬凹線を加える。

65は口径11.8cmの蓋。つまみ直径3.6cm。66～70は鉢である。66は小型品であり、口縁部を短く折り上げ、端部を先細りさせる。外面にススが付着する。67は底から3cmほどまでは被熱により赤色を呈し器表が部分的に剥離する。口縁部・胴下半外面にはススが付着する。66･67は31～34と似通った胎土・発色・焼成で丁寧なつくりをなし、鉢は特に薄く均質な器肉をもつ。68～70は有段口縁鉢である。68は内面を赤彩し、口縁部には凹線を3条巡らす。69は内外面を赤彩する。底部に直径5mmの穿孔がなされており、穿孔部内面周囲には成形時のハケ調整が残る。70は口縁部と内面を赤彩する。外面にはススが付着する。

71は台石である。上・側面が良く磨耗する。平坦な下面は自然面ではないもののわずかに磨耗しており、板（箱）状に破砕した礫を台石として利用した可能性がある。残存で重量5,360gを測る。

SD 6出土土器は、30・39・40が中期後葉に位置づけられ、38・41や受け口状口縁甕、あるいは口縁部を短く立ち上げる高杯・器台に後期前半以前の可能性がある。ほかはおおむね後期後半に位置づけらよう。

72～87はB区SD 8出土である。72は広口壺。73は外傾度の強い口縁部をもつ大型壺である。細い頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に1列、肩部に3列の刻みをめぐらす。肩部の刻みは楔形をなす。74～79は甕である。74は口縁部内面に綾杉状刺突を、口唇部外面に刻みをめぐらす。75は口縁部中途を強くナデ凸帯状に突出させ、これに刻みを加える。76は受口状口縁を持つ甕であり、まっすぐ引き上げた口縁部外面に斜位の刻みをめぐらす。77は倒卵型の胴部を持つ。78は口唇部を上下に引き出し、外面に浅い凹線をめぐらす。79は甕肩部片であり、内面をケズリ調整し、外面には刻みをめぐらす。

80は高杯である。杯部上半を強く外反させる。81は高杯 or 器台脚裾部である。広がりは小さく、裾端部を角張らせる。82は高杯である。肥厚した裾部上面に赤彩を施し、内面にはススが付着する。83は高杯裾端部とみられる。上面が弱く段をなし、円形と三角形のスタンプ文加えられる。84は器

台である。杯部有段鉢形をなす。やや棒状ののち大きくひろがる脚裾部に４孔を穿つ。内・外面を赤彩する。85 は器台である。口縁部・脚裾部とも大きく外展する。堅緻な焼成である。86 は台付鉢とみられる。87 は土製紡錘車である。直径４㎝、厚さ 0.6 ～ 0.7㎝、孔径 0.5㎜前後、残存で重量 5.03 g を測る。SD ８出土土器は中期後葉～後期前葉を主体とするが、後期後葉の 84 も認められる。

88 は A 区 P ３出土である。壺肩部であり、横位・簾状・縦位の櫛描文を加える。中期後葉のもの。

89 は A 区 P11 出土の石族である。ガラス質安山岩製で、石槍状の長い形状をなす。長さ 5.0㎝、幅 1.6 ㎝、厚さ 0.6㎝、重量 4.1 g を測る。

90 は A 区 P13 出土であり、甕とみられる。

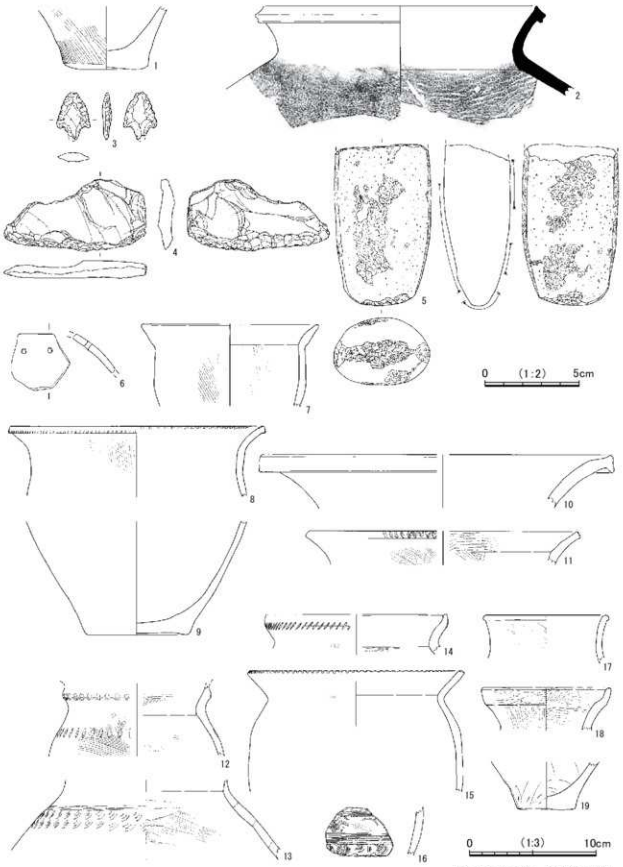
91 は P23 出土の受口状口縁を持つ甕。角張り気味の口縁上面に幅の狭い面を取り、口縁部外面下端には刻みをめぐらす。

92 は B 区包含層出土の大型壺口縁部であり、円形浮文を２個貼付する。

93 ～ 95 は B 区較部出土の甕である。93 は外反する口縁部を短く外方へつまみあげる。器肉は薄く均質である。95 は壺とみられる。水平に引き出した口縁端部を上に折り上げ、外面に凹線をめぐらす。

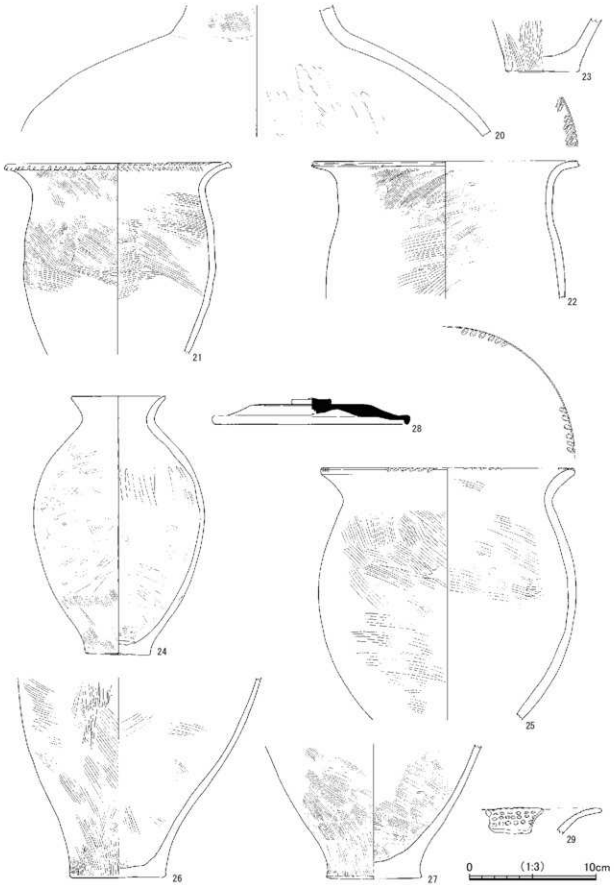
96 は B 区遺構検出面出土の紅簾片岩製の石鋸である。玉作りに伴う遺物とみられる。上下両縁が磨耗する。両端を欠損し、残存幅 2.2㎝、高さ 1.3㎝、厚さ 0.3㎜、重量 1.6 g を測る。

その他小片であるが、SK ８からは後期の、SK ９からは中期後葉の土器が出土している。

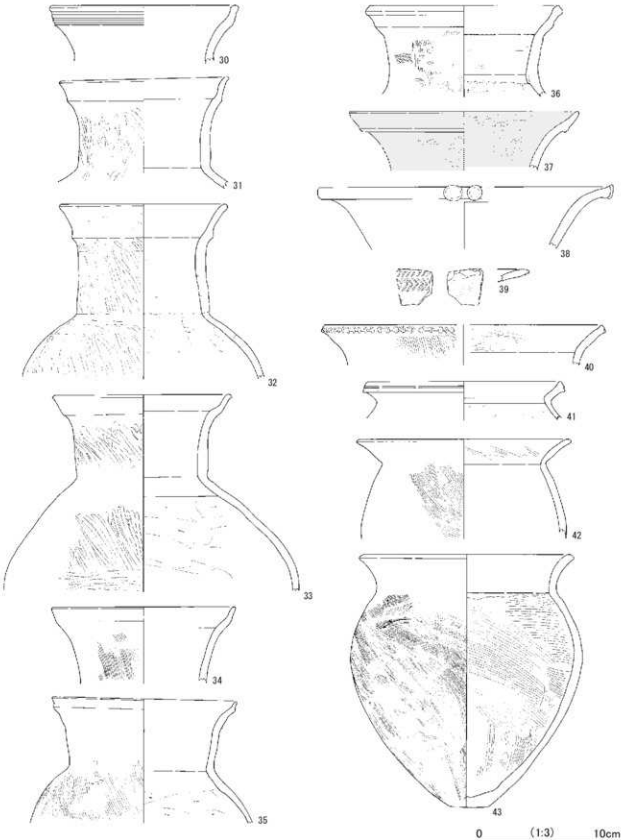


(3～5：S=1/2、他：S=1/3)

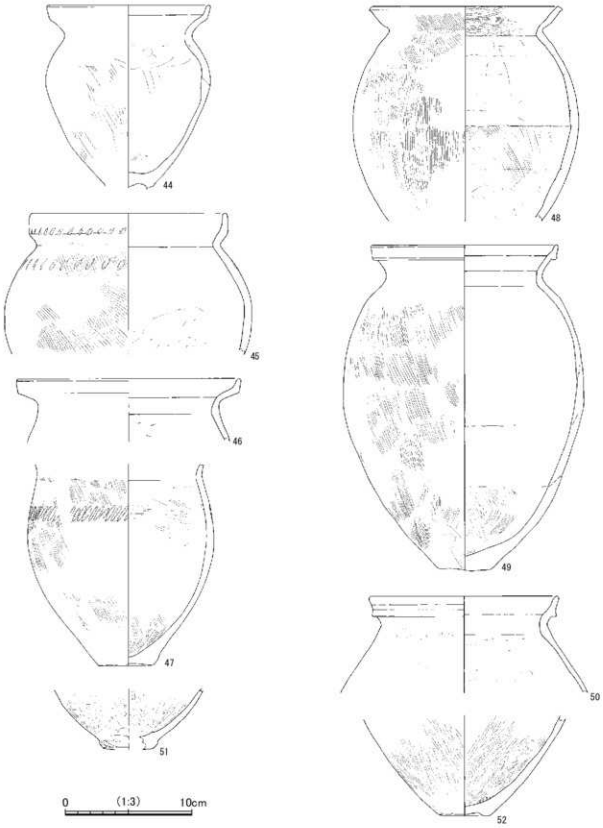
第17図　出土遺物実測図1



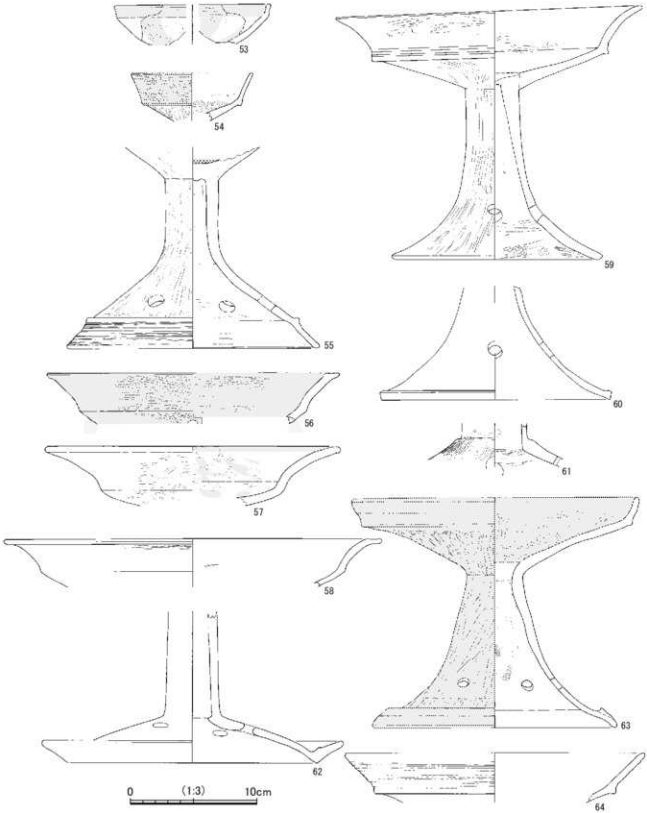
第 18 図　出土遺物実測図２



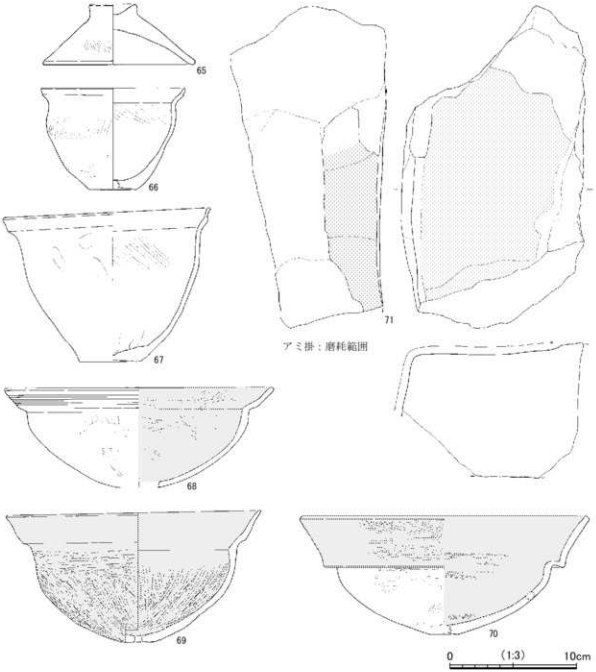
第19図　出土遺物実測図3



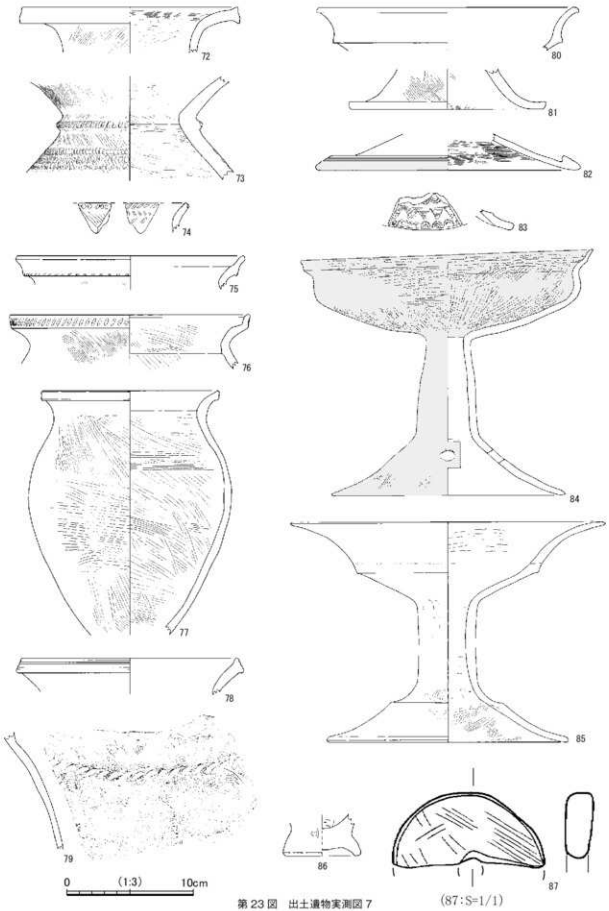
第 20 図　出土遺物実測図 4



第21図　出土遺物実測図5

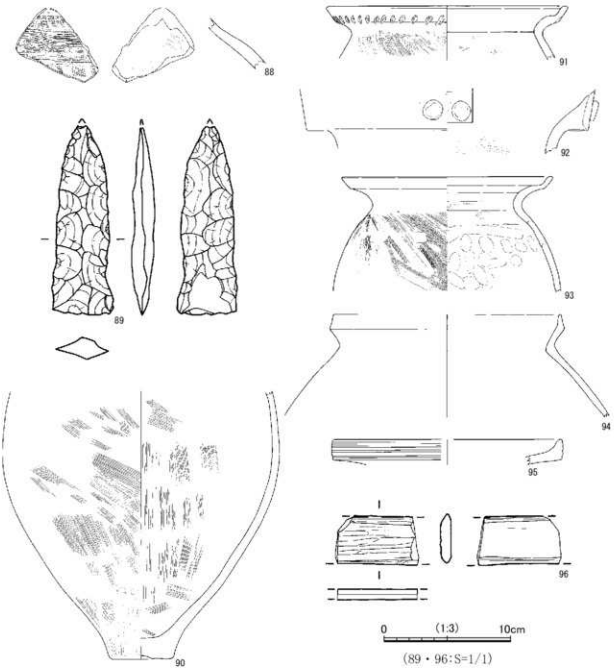


第 22 図　出土遺物実測図 6



第23図　出土遺物実測図7

(87:S=1/1)



(89・96:S=1/1)

第 24 図　出土遺物実測図 8

報告番号	地区 遺構	種類 器種	口径（cm） 底径（cm）	器高（cm） 重量（g）	色調（内） 色調（外）	胎土	調整（内） 調整（外）	口縁残 底部残	焼成	図化番号
1	B区	弥生土器			浅黄橙	粗砂少　細砂多	ナデか	-	良	C87
	ST1-③	甕？	6.8		浅黄橙	海綿骨針多　金雲母微	ハケ、ナデ	12/12		
2	B区	須恵器	(21.5)		灰	粗砂多	ロクロナデ	4/12	良	D2
	ST1-①/ST1-②	甕			灰		ロクロナデ、平行タタキ後カキ目	-		
3	B区	石器	長2.5	厚0.5					－	石6
	ST1（西アゼ）	石鏃	最大幅1.8	2.19						
4	B区	石器	高3.8	厚0.9					－	石4
	ST1-③	石匙	刃部幅7.5	(25.16)						
5	B区	石器	残存長8.6	厚3.6					－	石3
	ST1-③	磨製石斧	幅5.1	(235.4)						
6	A区	弥生土器			浅黄橙	粗砂多　赤色粒少	ナデ		良	C35
	SK2	無頸壺			浅黄橙		ナデ			
7	A区	弥生土器	(14.0)		暗灰	礫並　粗砂多　海綿骨針少	ナデ、ハケ	1/12	良	C82
	SK2	甕			鈍黄橙		ナデ、ハケ			
8	A区	弥生土器	(20.0)		褐灰	礫少　粗砂多　海綿骨針少	キザミ、磨託により調整不明	1/12	良	C33
	SK2	甕			褐灰		キザミ、ハケ、磨託により調整不明			
9	A区	弥生土器			浅黄橙	礫並　粗砂多	ナデ、磨託により調整不明		良	C32
	SK2	甕	7.7		浅黄橙	海綿骨針多　赤色粒多	磨託により調整不明	12/12		
10	A区	弥生土器	(27.5)		明黄褐	礫微　粗砂・細砂並	磨託により調整不明	1/12	良	C34
	SK4	壺			明黄褐	海綿骨針微　赤色粒少	磨託により調整不明			
11	A区	弥生土器	(21.2)		鈍橙	粗砂・細砂並　海綿骨針並	ハケ	1/12	良	C66
	SK5	甕			鈍橙		ナデ、ハケ、キザミ			
12	B区	弥生土器			橙	細砂・粗砂多　赤色粒並	ハケ	小片	良	C67
	SK7	壺			鈍橙	雲母少	ハケ、ナデ、キザミ			
13	B区	弥生土器			黄橙	粗砂・細砂多　赤色粒並	ハケ後ナデ	小片	良	C37
	SK7	壺			浅黄橙	雲母少	磨託、扁形文のみ残る			
14	B区	弥生土器	9.3		浅黄橙	粗砂・細砂多	ハケ、ハケ後ナデ	1/12	良	C39
	SK7	甕			鈍橙		ナデ、ハケ、キザミ			
15	B区	弥生土器	(16.8)		浅黄	礫・粗砂多　海綿骨針並	ナデ、調離の為不明	3/12	良	C36
	SK7	甕			浅黄橙		ナデ、調離の為不明、キザミ			
16	B区	弥生土器			鈍橙	粗砂・細砂並	ナデ	小片	良	C38
	SK7	壺			鈍橙	海綿骨針多　赤色粒少	櫛描文			
17	B区	弥生土器	(9.4)		鈍橙	粗砂・細砂少　海綿骨針多	ナデ	2/12	やや不良	C84
	SK10	壺			明褐灰		ナデ、ハケ後ナデ			
18	B区	弥生土器	(10.0)		黒	粗砂・細砂並　海綿骨針並	ミガキ	2/12	良	C83
	SK10	壺			黒		ミガキ			
19	B区	弥生土器			橙	粗砂・細砂並　海綿骨針多	ナデ		良	C86
	ST1内SK12	甕or壺	4.6		橙		ナデ、ケズリ	12/12		
20	B区	弥生土器			橙	粗砂多　海綿骨針多 赤色粒並	ハケ後ナデ	小片	良	C40
	SK13	壺			橙		ハケ、ナデ			
21	B区	弥生土器	17.5		鈍黄橙	粗砂並　海綿骨針並	キザミ、ナデ、ハケ	6/12	良	C3
	SK13	甕			橙		キザミ、ナデ、ナデ			
22	B区	弥生土器	(20.7)		浅黄橙	礫微　粗砂多　細砂少	キザミ、ナデ、ハケ	1/12	良	C41
	SK13	甕			鈍橙	海綿骨針　雲母少	ナデ、ハケ			
23	B区	弥生土器			浅黄橙	粗砂並　細砂多　海綿骨針多	磨託により調整不明		良	C42
	SK13	甕	5.9		橙		ハケ	12/12		
24	B区	弥生土器	11.3		鈍黄橙	粗砂多　海綿骨針多	ナデ、ケズリ、ハケ	1/12	不良	C43
	SK14	壺	5.1		浅黄橙		ハケ、ミガキ	11/12		
25	B区	弥生土器	(19.9)		灰白	粗砂多　海綿骨針少	キザミ、ハケ	7/12	不良	C44
	SK14/SD6切部	甕			橙		キザミ、ナデ、ハケ			
26	B区	弥生土器			浅黄橙	粗砂並　海綿骨針並	磨託激しい、ハケか		良	C25
	SK14/SD6切部	壺	7.7		鈍橙		ハケ、ミガキ	9/12		
27	B区	弥生土器			灰	粗砂並　海綿骨針多	ハケ		良	C57
	SK14/SD6切部	甕	(10.7)		鈍黄橙		ハケ	5/12		
28	B区	須恵器	(15.2)		灰	粗砂・細砂並　黒色粒多	ロクロナデ	3/12	良	D1
	SK14	蓋			灰		ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ			
29	B区	弥生土器			鈍黄橙	粗砂並　海綿骨針少	ナデ、円形スタンプ文４段	小片	良	C52
	SD5	甕			鈍黄橙		ナデ			

第２表　出土遺物観察表１

報告番号	地区 遺構	種類 器種	口径（cm） 底径（cm）	器高（cm） 重量（g）	色調（内） 色調（外）	胎土	調整（内） 調整（外）	口縁残 底部残	焼成	図化番号
30	B区	弥生土器	(14.8)		浅黄橙	礫少　粗砂並	磨耗により調整不明	2/12	良	C71
	SD6	壺			浅黄橙	海綿骨針多　赤色粒少	ナデ、凹線			
31	B区	弥生土器	13.1		鈍橙	粗砂並　海綿骨針多	ナデ	10/12	良	C11
	SD6	壺			鈍橙		ナデ、ミガキ			
32	B区	弥生土器	12.9		鈍橙	粗砂少　海綿骨針多	ナデ、ナデ	10/12	良	C12
	SD6	壺			鈍橙		ナデ、ミガキ			
33	B区	弥生土器	13.7		鈍橙	粗砂並　海綿骨針並	ナデ、ケズリ	12/12	堅緻	C10
	SD6	壺			橙		ナデ、ミガキ			
34	B区	弥生土器	(14.4)		鈍橙	精良　粗砂少　海綿骨針多	ナデ	3/12	堅緻	C55
	SD6	壺			鈍橙		ナデ、ハケ			
35	B区	弥生土器	14.7		鈍橙	粗砂並　海綿骨針多	ナデ、ケズリ	5/12	良	C13
	SD6	壺			鈍橙		ナデ、ハケ			
36	B区	弥生土器	(14.9)		鈍黄橙	礫・粗砂並　海綿骨針微	ナデ、ハケ	4/12	良	C24
	SD6	壺			鈍黄橙	赤色粒多	ナデ、ハケ			
37	B区	弥生土器	(17.9)		鈍黄橙	粗砂多　海綿骨針多	ミガキ	2/12	良	C73
	SD6	壺			鈍黄橙		ナデ、ナデ、ハケ			
38	B区	弥生土器	(23.0)		鈍黄橙	粗砂多　海綿骨針並	ナデ	2/12	良	C60
	SD6	壺			鈍橙		ナデ			
39	B区	弥生土器			灰黄	粗砂並　海綿骨針少	ハケか	小片	良	C75
	SD6	甕			鈍黄橙		綾杉状刺突			
40	B区	弥生土器	22.0		鈍黄橙	礫・粗砂並　海綿骨針並	ハケ	小片	良	C77
	SD6	甕			鈍橙		キザミ、ハケ			
41	B区	弥生土器	(15.3)		鈍黄橙	粗砂多　海綿骨針並	ナデ、ナデ、ケズリ	2/12	良	C85
	SD6	甕			鈍黄橙	赤色粒並	ナデ			
42	B区	弥生土器	(16.5)		灰黄	礫並　粗砂多　海綿骨針多	ナデ、ハケ、ナデ	2/12	良	C21
	SD6	甕			灰黄		ナデ、ハケ			
43	B区	弥生土器	16.1	20.1	鈍黄橙	礫多　粗砂多　海綿骨針多	ナデ、ハケ、ナデ	3/12	良	C26
	SD6	甕	3.1		鈍黄橙		ナデ、ハケ、ナデ			
44	B区	弥生土器	12.7		浅黄橙	礫多　粗砂多　赤色粒並	ナデ、ナデ	5/12	良	C6
	SD6	甕			黄橙		ナデ、ハケ			
45	B区	弥生土器	(15.3)		鈍黄橙	礫少　粗砂並　海綿骨針多	ナデか、ケズリ	1/12	良	C61
	SD6	甕			鈍黄橙		ナデ、ハケ、キザミ			
46	B区	弥生土器	(17.6)		鈍黄褐	礫多　粗砂並　海綿骨針並	磨耗により調整不明	2/12	良	C74
	SD6	甕			鈍橙		ナデ、磨耗により調整不明			
47	B区	弥生土器			浅黄橙	礫少　粗砂多	ハケ		良	C22
	SD6	甕	4.4		浅黄橙		ハケ、キザミ	12/12		
48	B区	弥生土器	(14.7)		鈍黄橙	粗砂並　海綿骨針多	ハケ、ナデ、ハケ、ケズリ	1/12	良	C19
	SD6	甕			鈍黄橙		ナデ、ハケ			
49	B区	弥生土器	14.6	25.7	黄橙	礫極少　粗砂多　海綿骨針並	ナデ、ナデ、ハケ	4/12	良	C9
	SD6	甕	4.0		浅黄橙		ナデ、ハケ	12/12		
50	B区	弥生土器	(14.7)		鈍黄橙	礫少　粗砂並　海綿骨針並	ナデ、ケズリ	4/12	良	C59
	SD6	甕			鈍黄橙		ナデ、ナデ、ミガキ			
51	B区	弥生土器			灰	礫少　粗砂多　海綿骨針多	ハケ後ケズリ		良	C18
	SD6	甕	4.1		黄褐		ハケ後ナデ一部ケズリか	3/12		
52	B区	弥生土器			浅黄橙	礫並　粗砂多　海綿骨針多	ハケ		良	C17
	SD6	甕	5.1		鈍赤橙		ハケ	12/12		
53	B区	弥生土器	(12.1)		鈍橙	粗砂少　海綿骨針並	ミガキ	1/12	良	C76
	SD6	高杯 or 器台			鈍橙		ミガキ			
54	B区	弥生土器	9.5		鈍黄橙	粗砂並　海綿骨針並 赤色粒少	ミガキ、磨耗により調整不明	3/12	良	C23
	SD6	高杯			鈍橙		ミガキ			
55	B区	弥生土器			鈍黄橙	粗砂並　海綿骨針並	ナデ		良	C16
	SD6	高杯	20.1		鈍黄橙		ミガキ、擬凹線	3/12		
56	B区	弥生土器	(22.9)		鈍黄橙	粗砂並	ミガキ	1/12	良	C56
	SD6	高杯			鈍黄橙		ミガキ			
57	B区	弥生土器	(22.8)		鈍赤褐	精良　粗砂少　海綿骨針多	ミガキ	小片	良	C27
	SD6	高杯			鈍黄橙		ミガキ			
58	B区	弥生土器	(29.7)		浅黄橙	粗砂並　海綿骨針並 赤色粒少	ミガキ、磨耗により調整不明	1/12	良	C70
	SD6	高杯			浅黄橙		ミガキ、磨耗により調整不明			
59	B区	弥生土器	23.9	20.2	浅黄橙	礫少　粗砂多	ミガキ、ケズリ、ハケ	7/12	良	C2
	SD6	高杯	16.7		鈍黄橙		ミガキ、ハケ、ミガキ	9/12		

第３表　出土遺物観察表２

報告番号	地区 遺構	種類 器種	口径（cm） 底径（cm）	器高（cm） 重量（g）	色調（内） 色調（外）	胎土	調整（内） 調整（外）	口縁残 底部残	焼成	図化番号
60	B区	弥生土器			橙	礫少　粗砂多	磨耗により調整不明		不良	C58
	SD6	高杯 or 器台	18.3		赤橙		磨耗により調整不明	7/12		
61	B区	弥生土器			鈍黄橙	礫少　粗砂多	ナデ、ハケ		良	C72
	SD6	高杯 or 器台			鈍橙	海綿骨針多　赤色粒少	ミガキ	小片		
62	B区	弥生土器			浅黄橙	礫・粗砂多　海綿骨針少	磨耗により調整不明		不良	C53
	SD6	高杯 or 器台	19.8		浅黄橙		磨耗により調整不明	12/12		
63	B区	弥生土器	22.4	18.3	鈍橙	粗砂並　海綿骨針並	ミガキ、ナデ、ハケ、ナデ	10/12	良	C8
	SD6	器台	19.4		鈍橙		ナデ、ハケ、ミガキ	5/12		
64	B区	弥生土器	(23.5)		鈍黄橙	粗砂並　海綿骨針並	ナデ	2/12	良	C28
	SD6 排土	器台			鈍黄橙		ナデ、擬凹線			
65	B区	弥生土器	11.8	4.8	浅黄橙	礫並　粗砂多　海綿骨針多	磨耗により調整不明	1/12	良	C15
	SD6	蓋			浅黄橙		ハケ、磨耗により調整不明			
66	B区	弥生土器	11.3	8.1	鈍橙	精良　粗砂並　海綿骨針多	ナデ、ハケ、ナデ	11/12	堅緻	C5
	SD6	鉢	3.7		鈍橙		ナデ、ハケ、ナデ			
67	B区	弥生土器	16.2	12.2	鈍橙	精良　粗砂並　海綿骨針多	ナデ、ハケ後ナデ、ナデ	6/12	堅緻	C7
	SD6	鉢	5.0		鈍橙		ナデ、ナデ	12/12		
68	B区	弥生土器	21.1		浅黄橙	精良　礫少　粗砂多	ミガキ、ハケ、ミガキ	7/12	良	C1
	SD6	鉢	3.4		浅黄橙	海綿骨針並	凹線、ミガキ	1/12		
69	B区	弥生土器	10.1	10.5	灰白	精良　粗砂並　海綿骨針並	ナデ、ミガキ	6/12	良	C14
	SD6	鉢	2.9		灰白		ナデ、ミガキ	12/12		
70	B区	弥生土器	(22.5)	9.4	橙	礫並　粗砂多　海綿骨針少	ナデ、ミガキ	1/12	良	C20
	SD6	鉢	2.2		灰黄		ナデ、ミガキ、ナデ一部ケズリ	2/12		
71	B区	石製品	残存長 25.5	残存厚 12.9						G 1
	SD6	台石	残存幅 14.6	5,360						
72	B区	弥生土器	(17.0)		鈍橙	礫並　粗砂多　海綿骨針多	ナデ、ハケ	3/12	良	C79
	SD8	壺			鈍黄		ナデ、ハケ			
73	B区	弥生土器			鈍黄褐	礫多　粗砂多　海綿骨針多	ハケ		良	C30
	SD8	壺			灰黄褐		キザミ、ハケ、ナデ			
74	B区	弥生土器			鈍橙	礫少　粗砂多	キザミ		良	C45
	SD8	甕			橙	海綿骨針少　赤色粒多	キザミ、ハケ			
75	B区	弥生土器	(18.0)		鈍黄橙	礫少　粗砂多	ナデ	1/12	良	C63
	SD8	甕			鈍黄橙	海綿骨針並　赤色粒多	ナデ、キザミ、ハケか			
76	B区	弥生土器	(19.0)		浅黄橙	粗砂多　海綿骨針多	ナデ、ハケ	2/12	良	C64
	SD8	甕			浅黄橙		キザミ、ハケ			
77	B区	弥生土器	(14.0)		褐灰	礫少　粗砂多　海	ナデ、ハケ	4/12	良	C29
	SD8	甕			褐灰	綿骨針多　赤色粒少	ナデ、ハケ			
78	B区	弥生土器	(17.0)		鈍黄橙	礫少　粗砂多	ナデ	1/12	良	C81
	SD8	甕			鈍黄橙	海綿骨針多　赤色粒少	擬凹線、ナデ			
79	B区	弥生土器			橙	礫少　粗砂多　赤色粒少	ケズリ、ハケ		良	D3
	SD8	甕			鈍黄橙	海綿骨針多	キザミ、ハケ			
80	B区	弥生土器	(20.4)		灰　鈍橙	礫少　粗砂多　海綿骨針多	ナデ	2/12	良	C80
	SD8	高杯			暗灰		ナデ、ナデ			
81	B区	弥生土器			鈍橙	礫少　粗砂多　海綿骨針並	ハケ後ナデ		良	C78
	SD8	高杯 or 器台	(15.2)		鈍橙		ナデ、ハケ	1/12		
82	B区	弥生土器			鈍黄橙	粗砂多　海綿骨針多	ナデ、ハケ		良	C65
	SD8	高杯	(20.6)		浅黄橙	赤色粒少	ナデ、擬凹線、ナデ	2/12		
83	B区	弥生土器			灰白	粗砂多　海綿骨針少	ナデ		良	C62
	SD8	高杯			灰白		S字スタンプ文、三角スタンプ文			
84	B区	弥生土器	22.8	19.5	鈍橙	粗砂並　海綿骨針少	ミガキ、ナデ	7/12	良	C4
	SD8	高杯	18.0		鈍橙		ナデ、ミガキ、ナデ、ハケ	10/12		
85	B区	弥生土器	24.7	17.5	浅黄橙	礫極少　粗砂多　海綿骨針並	ミガキ、ケズリ、ハケ	3/12	不良	C54
	SD8	器台	19.0		浅黄橙		ミガキ	1/12		
86	B区	弥生土器			褐灰	礫少　粗砂多　海綿骨針多	ケズリ後ナデ		良	C31
	SD8	台付鉢	5.6		鈍黄橙		ナデ一部ハケ、ナデ	1/12		
87	B区	土製品		4.0	鈍橙	礫少　粗砂多　海綿骨針少	ナデ	6/12	良	C46
	SD8	紡錘車		5.03	浅黄橙		ハケ			
88	A区	弥生土器			鈍黄橙	粗砂並　海綿骨針少	ハケ	小片	良	C47
	P3	壺			鈍黄橙		櫛描文			

第４表　出土遺物観察表３

報告番号	地区 遺構	種類 器種	口径（cm） 底径（cm）	器高（cm） 重量（g）	色調（内） 色調（外）	胎土	調整（内） 調整（外）	口縁残 底部残	焼成	図化番号
89	A区 P11	石器 石鏃	長5.0 幅1.6	厚0.6 4.1				12/12	－	石2
90	A区 P13	弥生土器 甕		(5.0)	黄灰 橙	礫並　粗砂多 海綿骨針多　赤色粒多	ハケ後ナデ ハケ後ナデ	5/12	良	C48
91	B区 P23	弥生土器 甕	(18.7)		浅黄橙 浅黄橙	粗砂多　海綿骨針多 赤色粒並	ナデ、ハケか ナデ、キザミ、ハケ	2/12	良	C49
92	B区 包含層	弥生土器 壺			灰黄褐 鈍黄橙	粗砂多　海綿骨針並 赤色粒並	ハケ カキ目か、ナデ	小片	良	C51
93	B区 頸部	弥生土器 甕	(16.5)		鈍黄橙 浅黄橙	粗砂・細砂並 海綿骨針多　赤色粒少	ナデ、ハケ、ナデ ナデ、ハケ、ナデ	3/12	良	C50
94	B区 頸部	弥生土器 甕	(18.0)		灰 鈍橙	礫多　粗砂多 海綿骨針多　赤色粒少	磨耗により調整不明 磨耗により調整不明	1/12	良	C68
95	B区 頸部	弥生土器 壷 or 甕	(18.0)		浅黄橙 浅黄橙	礫少　粗砂多　海綿骨針少	ナデ 櫛凹線、ナデ	1/12	良	C69
96	B区 検出面	石製品 石鋸	高1.3 残存幅2.2	厚0.3 (1.6)					－	石5

第５表　出土遺物観察表４

第４章　総　　括

今回の調査では、弥生時代中期後葉～後期後葉頃の集落を確認した。調査地は、東西に長く南北が短いトレンチ状であり、調査面積は380㎡という比較的狭い範囲の発掘調査である。しかし、第３章第２節に記述したとおり、調査地は大変起伏に富んでいる地形であった。さらに、周辺の地形を概観すると北西の丘陵から続く台地が南東の盆地まで張り出しており、遺跡はその台地の先端部分に位置しているのである。現地では、県道向かいの畠付近が南東の水田より一段高くなっていることを確認している。なお、畠では古代の須恵器が表採できる。

本遺跡は、このように台地先端部から低地にかけて展開する集落であり、確認した遺構は土坑と溝が主体である。土坑は全体を調査できた数こそ少ないが、出土遺物から弥生時代中期後葉を主体としている。平面は隅丸方形を呈するものが多く、SK ２のように箱掘り状に掘られた土坑や、底面に小段をもつ土坑SK ５、７、13などがある。これらは２～４基ほどで一つの群をなしており、SK ３・５・６の群①、SK １・２・４の群②、SK ７・８の群③、SK ９・12・13・14の群④としてまとまることができる。

それぞれの位置は、群①＝Ａ区西端の低くなる地形付近、群②＝Ａ区東端の低くなる地形付近、群③＝Ｂ３区の低地付近、群④＝Ｂ５区の低地付近にあり、いずれも低くなる地形の近くに位置することが指摘できる。おそらく集落の中心は県道から向かいの畠付近にあるものとみられ、土坑群は一部にＡ区の建物と近接する箇所もあるが、居住域から少し離れた集落縁辺部にあるものと考えられる。

この時期の墓としては、方形周溝墓が代表的だが、区画施設を伴わない土坑墓や木棺墓もあり、これらは居住域と接して数基の墓からなる墓域としてつくられる。本遺跡で確認した土坑については形態と配置状況から墓の可能性を指摘しておきたい。

本遺跡周辺の弥生時代の遺跡（第２章参照）としては、矢田遺跡や館開館跡が挙げられるが、いずれも後期の遺跡である。今回の発掘調査によって中期後葉まで遡る遺跡を確認できた意義は大きく、当地に根を下ろした初期の土田盆地開発者であった彼らの営為は、次の古墳時代において能登地域最大級の前方後円墳である徳田１号墳（徳田燈明山古墳）を築く基盤となったであろう。

参考文献

石川県教育委員会　1992『石川県遺跡地図』石川県教育委員会
石川考古学研究会　1988『石川県城館跡分布調査報告』石川考古学研究会
大西　顕ほか　2005『志賀町　館開野間遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
岡本恭一　2006『志賀町　代田遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
志賀町史編纂委員会　1974『志賀町史』資料編第１巻　石川県羽咋郡志賀町役場
志賀町史編纂委員会　1980『志賀町史』第５巻沿革編　石川県羽咋郡志賀町役場
土肥冨士夫ほか　1981『代田営団遺跡』志賀町教育委員会
林　大智　2013『能登地域における弥生時代の墓制』『石川県埋蔵文化財情報第29号』(財)石川県埋蔵文化財センター
本田秀生　2005『志賀町館開テラアト遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
谷内明央　2006『志賀町　館開遺跡群』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
芳岡良音　1954『土田の歴史』(2010 復刻版) 羽咋郡土田村公民館

A 区完掘状況（東から）

A 区 SK2・4 完掘状況（南から）

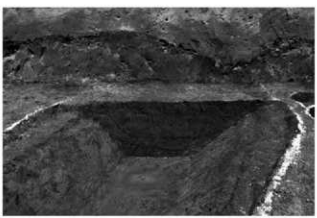
A 区 SK2 遺物出土状況（南から）

A 区 SK2・4 土層断面（西から）

A 区 SK3 土層断面（北から）

A 区 SK5 完掘状況（北西から）

A 区 SK5 土層断面（北西から）



A 区 SD2 土層断面（南から）

A 区 SD2 完掘状況（北から）

A 区 SK3・5・6、SB1 完掘状況（北東から）

A 区 SD3 完掘状況（北から）

A 区 P13 土器出土状況（北から）

A 区 P13 土層断面（北から）

A 区北壁土層断面（南から）

B 区完掘状況（西から）

B 区 SK7 完掘状況（北から）

B 区 SK7 土層断面（北から）

B 区 SK9 完掘状況（南から）

A 区 SK9 土層断面（南から）

B 区 SD9・SK10 土層断面（北から）

B 区 SK11 土層断面（北西から）

B 区 SK13 完掘状況（西から）

B 区 SK14 完掘状況（南から）

B 区 SK14 遺物出土状況（南から）

B 区 SD5 完掘状況（南から）

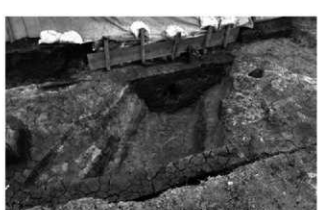
B 区 SD5 土層断面（南から）

B 区 SD6 完掘状況（南西から）

B 区 SD6 土層断面（南西から）

B 区 SD6 遺物出土状況（北西から）

B 区 SD7 完掘状況（北西から）



B 区 SD8 完掘状況（北東から）

B 区 SD8 土層断面（南西から）

B 区 SD9 完掘状況（北から）

B 区 ST1 土層断面（南西から）

B 区 ST1・SK13 土層断面（東から）

B 区 SX5 完掘状況（北から）

B 区 ST1 完掘状況（南西から）

B 区中央部完掘状況（東から）

B 区西壁土層断面（東から）

調査着手前状況（東から）

B 区表土除去作業（東から）

A 区遺構検出作業（東から）

A 区遺構掘削作業（東から）

B 区遺構検出作業（西から）

2
3
5
6
7
8
4
15
19
9
16
20
21
22
24
25
23
28
29
27
31
33
32
26
36
38
35
39
40
42
43

44
45
47
48
49
50
51
52
55
59
60
63
65
66
67
68
69
70
71
73
74
76
77
79
83
84
85
87
88
89
90
92
93
96

報告書抄録

ふりがな	しかまち　とくだみやのまえいせき
書名	志賀町　徳田宮前遺跡
副書名	地方道改築事業（主）田鶴浜堀松線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	立原秀明、澤辺利明
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
所在地	〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1　TEL076-229-4477　FAX076-229-3731
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （新）	東経 （新）	調査期間	調査面積	調査原因
徳田宮前遺跡 （とくだみやのまえいせき）	いしかわけんしかまちやた 石川県志賀町矢田	17384	15299	37度 3分 29秒	136度 49分 41秒	20130423 ～ 20130531	380m²	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳田宮前遺跡	集落	弥生時代	掘立柱建物、土坑、溝	弥生土器、石製品	

要約	弥生時代中期後葉から後期後葉頃の集落を確認した。土坑は、2～4基ほどがまとまって検出される地点が複数あり、土坑の形態と配置状況から土坑墓の可能性がある。溝からは、残りの良い土器がまとまって出土した。

志賀町　徳田宮前遺跡

発行日　平成 27（2015）年 3 月 31 日

発行者　石川県教育委員会
〒 920-8575　石川県金沢市鞍月 1 丁目 1 番地
電話　076-225-1842（文化財課）
公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒 920-1336　石川県金沢市中戸町 18 番地 1
電話　076-229-4477
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　前田印刷株式会社